

| 第6回 静岡市社会の大きな力と知を活かした根拠と共感に基づく市政変革研究会 会議録 |   |
|---|---|
| 開催日時                                      | 令和7年3月18日(火) 9:30~12:00   |
| 開催場所                                      | 静岡市役所 新館8階 市長公室 及びWEB(ZOOM)   |
| 出席者                                       | 青木成樹委員、内田晴久委員、黒石匡昭委員、近藤克則委員(WEB)、酒井敏委員、神成淳司委員、高尾真紀子委員、谷明人委員(WEB)、橋本正洋会長、森川高行委員、山岸祐己委員<br>〈欠席〉池田恵子委員、坂田一郎委員  |
| 要 旨                                       | <p><b>【次第1 開会】</b></p> <p><b>【次第2 会長挨拶】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今回で第6回の研究会となる。各分科会から、これまでの進捗報告に加え、来年度からどのように進めていくか報告がある。報告の後、委員の皆様から簡潔にコメントをいただきたい。</li> </ul> <p><b>【次第3 本日の進め方等】資料1</b></p> <p>〈事務局〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 12の分科会で政策研究を進め、昨年10月1日に開催された第5回研究会では、今年度の取組や今後の方向性について報告を行った。</li> <li>・ このうち、直ちに予算が必要なものについては予算要求を行い、資料のとおり、来年度当初予算編成において必要な予算措置を講じた。今後も、引き続き中長期の政策を検討していく。</li> <li>・ 本日の進め方については、この後、各分科会の職員から研究状況や今後の方向性等について5分程度報告を行う。その後、委員の皆様には補足や確認、コメントをいただき、最後に会長から総括コメントをいただく。</li> </ul> <p><b>【次第4 分科会進捗状況報告、質疑応答】資料2</b></p> <p>(分科会職員から資料に沿って説明後、質疑応答)</p> <p>(1) ウェルビーイング分科会</p> <p>〈高尾委員〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウェルビーイングは非常に概念的でわかりにくく苦勞したと思う。</li> <li>・ 今回、スマートシティ・インスティテュートの地域幸福度指標を使った調査をしているが、全国の自治体で、総合計画や予算に取り入れるなどの活用の先進事例がある。</li> <li>・ 1番大事なことは、市民や行政の各担当が、ウェルビーイング指標を成績表のように見るのではなく、合意形成のためのツールとして活用していくことである。</li> <li>・ これまでの研究会でも何度も申し上げたが、これをやったら指標数値が上がるというような簡単なものではない。</li> <li>・ 発表の中で事例があったように、子育ては子育て分野だけで取り組むのではなく、産業や雇用、まちづくりなどの様々な要因がウェルビーイングに関係するということを皆が理解するためのツールとして長期的、継続的に使っていくことが大事。</li> </ul> |

≪黒石委員≫

- ・ これを勉強だけで終わらせてはいけない。勉強という意味では素晴らしいスタートが切れたと思うが、実際の政策形成までどう繋げ、反映させていくかが大事である。
- ・ いつまでに、どのレベルまで、どのようにやるかという目標を掲げることについて、市長と相談しながら進めてほしい。

≪山岸委員≫

- ・ スマートシティ・インスティテュートの地域幸福度指標の算出手法だけでは、せっかく2,600人というサンプルサイズがありながら、情報としては圧縮しすぎており、市民の意見が見えてこない。
- ・ 人口減少対策では導入しているが、統計学の情報量という考え方をを用いて、意見が二極化しているのか、それともそんなに興味がないのか、というところまで拾うことができている。情報処理学会の全国大会で、静岡理工科大学の学生が学生奨励賞に選ばれるなど、学術的にも評価を得始めている。成果が出たら報告したい。

≪青木委員≫

- ・ ウェルビーイングという言葉は様々な分野に使われているが、社会科学を研究している立場から1番興味があるのは、主観という変数を入れた点。
- ・ 例えば、ウェルビーイング指標について去年と比較し、変化を見た時に、客観的な環境が変化しなくてもウェルビーイング指標が上がるとしたら、同じ環境であっても、それを受け取る個人の感覚、感性が上がることによってウェルビーイング指標が上がると考えてよいのか。

≪高尾委員≫

- ・ 客観的なこととの紐づけは非常に大事。個人の感じ方、主観が変わることはある。
- ・ 個人で見れば、個人的な状況で変わることはあるが、集計データとして見た時に、主観だけが大きく変わることはないと考える。
- ・ 例えば、個人の幸福度は天気によって変わるなど色々あるが、全体を見ると比較的安定していることが研究で分かっている。そういう意味で、一般論としては急に変わることはないと考える。

≪青木委員≫

- ・ 逆に言うと、その主観を上げようとする事自体が政策の1つになるのではないか。

≪高尾委員≫

- ・ もちろん、感じ方自体が教育により変わるということもある。よく北欧の幸福度が高いと言うが、客観的な幸福度だけでなく、小さなことに幸福を感じられるような教育をしているかどうかに関係する。

≪橋本会長≫

- ・ 詳細な調査をしてデータを持っているので、さらなる分析も必要だと考える。また、政策に繋げていく際のツールとしても非常に重要である。他の分科会の政策反映にあたっ

ても非常に重要だと思うので、上手に活用しながら、場合によっては追加調査も行い、引き続き勉強していただきたい。

## (2)人口減少対策分科会

### 《山岸委員》

- ・ まず、人口推計については前回も話があったかと思うが、2050年に50万人割れというのが、ある種、県内ではバズワードになりつつある。良い意味なのか、悪い意味なのか、様々な業界に対して緊張感は伝わっていると考えます。
- ・ アンケートの分析について、今回は詳細についてあまり報告できなかったが、交通の利便さや住宅条件、給料については意見がかなり割れており、住む場所など、その環境によって全然違うことがわかった。
- ・ 小、中学校の教育や、障害者、高齢者向けの福祉について、調査の対象が実際に経験したことがない人が多かったというのもあるかもしれないが、意見をあまり取れていないことがわかったため、不満はそれほどないと読み取れる。少しずつ分析を進め次回報告したい。

### 《青木委員》

- ・ 人口減少対策について約2年間研究してきたが、統計データあるいはアンケート調査に加えて高度な分析を踏まえて、統計的な理解、分析はかなりできたと考えます。
- ・ 次からは、もう少し現場の生の声を聞きながら、あるいは現場に効果や結果を見せていく必要がある。
- ・ 具体的に言うと、1つは人口減少対策については、社会動態、つまりは外に出ていく若い女性、男性が多いので、その辺をどうするかという点。2つ目は、実際に若者たちが地元に残った時に、魅力ある職場、働き方をどう作っていくのかという点。
- ・ 特に、静岡市経済を支える中小企業がどのように考えて対策をしていくのか、あるいは行政にどういった支援を望んでいるのかという点について考える必要がある。
- ・ 中小企業の数はかなり多いので、全部はできないにしても、現場の声を聞きながら、統計データの意味、意義を伝え、足りない部分を加えて、具体的な政策について検討できればと思う。

### 《橋本会長》

- ・ 静岡市の問題について、明らかになりつつあると感じている。
- ・ 5つの分野とあるが、市政のほとんど全部をカバーするような政策になっていることから、この分科会は他の分科会に対して様々な方向性の案を提供するという意味で、非常に重要だと考える。来年度以降も分析と提言をしていただきたい。

## (3)子育て教育分科会

### 《高尾委員》

- ・ 今回、当事者へヒアリングし、課題を細かく洗い出し、それに対してきめ細かく、本当に1番

必要なことは何か、ライフステージに合わせて、大きなものから小さなものまで支援を考え、政策を作った点が素晴らしいと思った。

- ・ 一方で、今後の取組としては、まだ不足する部分がある。地域や民間企業といった社会全体での取組に関して、人口減少対策とも関係するが、中小企業で女性が働きやすい、または女性が活躍できる、やりがいを持って仕事をできるような環境がないと、静岡市から転出してしまい、子育てもしにくいと思う。
- ・ それらを考えると、他の委員からもご指摘のあった、結婚やジェンダーという点にも向き合わないと、この問題は究極的には解決できないと考える。今後、分科会という形ではなくなるが、引き続き取り組んでほしい。

#### 《神成委員》

- ・ これだけの課題があるということはわかったが、洗い出した後が難しいと思っている。結局、子育てや教育の環境が良くないと、人口減少が続くことは明らかであるし、なかなか一概にはいかない。
- ・ これからは、プロジェクトチームで教育改革や他のチームと連携した取組を行わないと成果は出ない。
- ・ 一方で、以前にも申し上げたが、まず市役所職員の子育て環境が、静岡市で1番良くなってほしいというのが、私の切なる願いでもある。それはぜひ実現してほしい。それがないと、民間企業などへの波及効果もないと思う。

#### 《難波市長》

- ・ 合計特殊出生率が出ているが、人口減少に影響しているのは出生率である。静岡市の出生率は先ほどの資料のとおり最低である。
- ・ なぜかという、生産年齢人口が政令市の中でも最も少なく、あるいは65歳以上が極めて多く、若い世代、子供が生まれる世代の人口が非常に少ないことによる。総人口の減少よりも、子どもを産む世代の人口が少ないことによる将来的な子供の数の減少が顕著になってくることを認識しなければならない。
- ・ そのため、今までの延長上の改善では間に合わない。根本からやり直すぐらいに進めないと、子供の数の減少に対して対応できない。
- ・ 人口減少対策分科会で、小学校区単位で人口推計データを出したことは非常に良かった。こども園の数は2050年になると大幅に減少する見込み。近くに保育園がないから遠くに預けに行かないといけないとなると、ますます子育て環境が悪くなる。ものすごい危機感をもって対応しないと大変なことになることがデータで明らかになった。市役所の子育て環境の改善も含めて徹底的に取り組まないといけない。

#### 《橋本会長》

- ・ 市役所の環境改善も非常に重要だが、細かくはっきり課題が見えたので優先順位も付けられるし、高尾委員がおっしゃったように、中小企業の子育て支援、育休が取りにくいという結果も出ているので、そういったところをどう引き上げていくか考える必要がある。ただ予算をかければいいのかという問題ではないので難しいと思うが、市長の問題意識も踏まえて

抜本的に進めてほしい。

#### (4)新共助社会分科会

##### ≪黒石委員≫

- ・ 前年踏襲だけでは時代の変化についていけないので、自助、共助、公助の役割の見直しを図り、どう変えていくかという点で新共助社会は重要なテーマである。
- ・ 熊本市では、新しい地域のコミュニティづくりにおいて、市役所の若手職員を地域ごとに配置し新たな活動をするという取組を実施し、かなり良くなったという結果も出ている。
- ・ 限られた経営資源を戦略的に最適配分する視点から、それぞれの課題にどう対応していくか考える中で、自助、公助、共助について、全ての縦割り、横割りを排した見直しとシナリオメイクが必要となる。
- ・ 今まで公助であったものを共助、自助にどう転換させていくか。方法は色々あると思うが、ポジティブな転換が重要ではないかと考える。例えば、各企業に兼業プレイヤーを抽出してもらい若手アドバイザーを募集するなど、ポジティブな視点が必要と考える。

##### ≪難波市長≫

- ・ 今までの延長上では無理だろうと思っている。分科会において、業務プロセスの分析による無駄の洗い出しは行ったが、実施は分科会ではできない。4月からは副市長をチーム長として、改革の具体化を行っていく。
- ・ 例えば、敬老祝い金は自治会の役員などに負担がかかっていたため廃止した。やめるものについて、副市長も含めて判断を行い、取組を精査していく。
- ・ 静岡市では、江戸時代からの歴史性で自治が成り立っている。小さなお祭りをずっと守っている。お祭りが地域のコミュニティの形成に役立っているものの、若い世代が少なくなっているので持続が難しくなっている。黒石委員が言うように、市の若手職員を投入するなど、持続可能な形を考えていく必要がある。

##### ≪橋本会長≫

- ・ 現場との意見交換やネットワークづくりが非常に大事だと思う。市長のコメントのとおり、引き続き具体化を進めていってほしい。

##### ≪神成委員≫

- ・ 市長がおっしゃったように、いろいろな整理が必要。
- ・ 世代を超えた人たちが連携していくためには、そこに参加することによるメリットが大事。参加することによって、新しい情報や機会が得られるというメリットがないと参加しなくなってしまう。市長がおっしゃったように、元々のコミュニティはあるものの、次の世代が参加しないと結局は壊れてしまう。新しく仕事を作る必要はないが、地域のインターフェースとしての文化芸術であるとか、様々な連携により参加するメリットが増えるのではないかと考える。

#### (5)市民の声を聴くシステム分科会

##### ≪高尾委員≫

- ・ 市民の声を聞くためのガイドライン、アンケートは非常に良くできている。大学でアンケート調査表をどう作るかという授業を行っているが、そのお手本としたいものであった。
- ・ 一方で、何度も伝えているが、市民が何かを言えば市にやってもらえるとなるのは、信頼感という点では良いが、あまりそこばかりになっては良くない。言えばやってもらえる、自動販売機のような行政ではいけない。あくまで、発表の最後にあった「だもんで静岡」のように、投稿者同士でも課題解決に結びつくような、市民参加のツールにしていき、具体的な解決策につなげていくのが理想的である。
- ・ 行政が何かを作るのではなく、市民が作っていくのだという意識醸成につながればよい。そのベースで、行政がきちんと答えてくれるという信頼感が、今回のスキームによりできていくのだと思う。

##### ≪橋本会長≫

- ・ 作成したガイドラインを市職員に浸透させると資料に書かれているが、やはり職員 1 人 1 人の意識がどう変わるかという点が非常に大事になってくる。市民はちゃんと見ているので、引き続きこの方向で進めていただきたい。

#### (6)ヘルスケア分科会

##### ≪神成委員≫

- ・ 一過性で実施しても意味がなく、いかに持続的な活動につなげていくかが重要。
- ・ 難聴に関する取り組みにおいて、スクリーニングにより示された受診を要するハイリスク率が7割と資料に記載がある。7 割の人が難聴に課題を抱えていることに本人が自覚していなかったということで、きちんと対応していかなければならない点ではないか。このような結果を踏まえながら、具体的に、実証から実装へとどう進めていくのかを考えていかないといけない。

##### ≪近藤委員≫

- ・ 前回発言したように、国の計画(健康日本21(第三次))の策定委員会においても行動変容は思っているより簡単ではないということがわかってきており、環境への着目、暮らしているだけで健康になるような環境づくりに重点がシフトしているので、静岡市で先駆例を作してほしい。
- ・ 分科会としては終了するということだが、他の部局の取組の中に健康の視点を入れてほしい。実際、それぞれの部局はその部局の目標を優先するので、健康の視点は入れた方がいいが、後回しにされがちということもあると思う。まちづくりにおける健康指標の改善につながっているのかという評価は、健康部局が実施しないと誰も評価していないという状態になりかねないという点を危惧している。
- ・ 例えば、他市町村で、グリーンスローモビリティで移動の足を提供したら外出機会が増えたという一方で、今まで不便で20分歩いていた人が、移動手段ができたことで歩行時間が

減ったという事例もあった。グリーンスローモビリティで移動の足を確保してあげれば自動的に健康になるというのは幻想で、移動の足と目的地で何をするかという設計デザインができていないか、もしくはそのように設計されているか、健康にどう影響するか、などの視点からのPDCAを回さないと期待する成果に結びつかない。健康の視点からのPDCAを回すことについて、どこが担うのか、体制を整備して進めてほしい。

《分科会職員》

- ・ 確かに、まちづくりの分野に組み込まれ、健康づくりの視点が弱まってしまふ懸念はあるかもしれない。
- ・ ただ、近藤委員がおっしゃったように、意識しないで健康になれる生活環境に向かっていくことの重要性や、健康に向かう行動を起こしてもらうことの困難性をとても痛感している。
- ・ 今回の話を持ち帰り、まちづくりにおいて他の部局との連携のもとに、前進していきたいと思う。健康づくり分野としての評価については考えながら進めたい。

《橋本会長》

- ・ 分科会としては終わりであるが、例えばウェルビーイングもかなり関係すると考える。もし課題が形骸化するような場合は、再度分科会において研究していただきたい。

(7)DX①次世代防災分科会

《谷委員》

- ・ 巴川浸水推定システムのように、全国的に先進的な成果が得られた。本分科会を推進する中で縦横斜めの連携もあったかと思う。今後は運用をフィードバックし、さらにより良いシステムに作り上げていってほしい。

《神成委員》

- ・ 最終的に通常時から連携体制の構築に取り組んでいることに評価したい。災害時にどのようなトラブルが現場で起きていたのか、災害時は職員も被災者でもあるから、災害時にいつ何を誰が意思決定するのかなど、現場レベルでの対応ができるように、過去の事例から学び、引き続き考えていってほしい。
- ・ 被害認定調査は、市民にも市職員にも莫大な負担となっているので、効率化に向けた検討を早く進める必要があると考える。関係団体とも引き続き連携して検討を進めてほしい。

(8)DX②デジタル行政分科会

《山岸委員》

- ・ 個々の手続きにおいては優先的にデジタル化を進めたほうがいい部分もあると思う。静岡市では、グラファターのスマート申請は導入されていて、非常にわかりやすい。現役世代、子育て世代としては、窓口に行ったり郵送したりするよりもスマホ1つで手続きが完結するとインパクトが強い。そういう意味で優先的にデジタル化するべきものもあるのではと思う。

≪神成委員≫

- ・ 良く言われるが、システムを導入しないと業務改革できないというのは嘘で、最初にシステムを導入すると逆に破綻することが多い。これまで分科会において、自分たちで業務プロセスを見直し、設計して業務改革を推進するという流れができた点がよかった。おくやみ窓口の手続きが、実は3区でバラバラであったという実態をきちんと把握することができ、エクセルが古いとかではなく、逆にシステムコストを一銭もかけずに、業務改革を自分たちで推進したことは分科会メンバーにとっても有意義な経験だったのではないかと。山岸委員がおっしゃったわかりやすいシステムは、その業務検討の次の段階にやるべきことだと思っている。形式だけスマホで完結できても、バックオフィスが全く変わっていなければ、業務が増えるだけである。縦割りを壊して最適なものができるかという検討はこれから検討する段階だが、少なくとも業務をこう変えていくんだということが見えてきたのではないかと。
- ・ この分野の改革は、あらかじめ最適解がわからない場合が多い。実施した段階では、どれが一番良いものかはわからず、徐々にバージョンアップしていけばよい。手続きの様式が変わっても、より良く改善できれば誰も文句は言わないので、着実に改革を進めることが大事。

≪橋本会長≫

- ・ これで終わりということはないので、着実に進めていただきたい。引き続き、現場の声をよく聞いて進めてほしい。

(9)DX③都市・交通分科会

≪森川委員≫

- ・ 周遊バスについて、無人のレベル4は難しいが、レベル2であっても乗りたいという人が一定程度いるので、日の出地区の周遊だけでなく、清水駅と清水港間の足としての交通も検討を進めていただきたい。
- ・ 中長期的な運転手不足については、2025年度に50か所でレベル4を実施するという政府目標もあるが、困難性が高く、運転手の削減につながるものにはならないと思う。我々としては、もう少し様子を見て、本当にレベル4化が見込まれるようになってから運転手不足に対して自動運転を活用する方向性でよいと考える。
- ・ 静岡市全体の公共交通の方向性としては、基幹的なバスは職業バス運転手に、中山間地域については公共ライドシェアなどの仕組みを使って職業運転手ではない人に手伝ってもらうのがよいのではないかと。思う。
- ・ 駅前ウォークابلについては、wi-fi センサーや ETC2.0 プローブデータなどを使い、人流についてかなり面白いことが分かってきた。自家用車も3割程度迂回が可能など、様々なエビデンスが取れたので、短期中期長期の方向性で今後関係者と検討を進めていただきたい。

≪山岸委員≫

- ・ 移動のみが目的であればこの形で良いと思うが、周遊や回遊を考えると、コストのわりに移動の範囲やスピードのカバーといった点で厳しい部分があるというのが現時点の報告書で思ったところである。
- ・ 例えば、浜松市ではループが導入され、周遊、回遊、ラストワンマイルの移動がかなりの場合に解決できるとともにインフラの変革というインパクトも強かった。現役世代の交通、周遊が変わる点で、そのあたりの検討も必要ではないか。
- ・ 駅前ウォークアブルに関しては、M20 ビルができてから、JR 静岡駅前の地下の人流も変わってきている。特に、目的をもって M20 ビルに訪れる人も増えているので、データの更新もできたらよいと思った。街中は車を排除していくという流れもわかるが、静岡市は朝昼夜で街の顔が違うので、特に夜、不便にならないかという点も議論したい。

≪橋本会長≫

- ・ 短期中期の課題と書かれているので、短期の課題についてはなるべく早く進めていただきたい。

(10)BX分科会

≪内田委員≫

- ・ 約2年かけて内閣府の地方創生予算獲得という最大の成果を得られた。橋本会長中心に、市も準備してきた結果だと思う。原資に基づき具体的な成果を出していくことがこれからの課題になっていくと思う。
- ・ また、海洋産業振興に関する資産利活用について、特に静岡市は海をキーワードに、神戸港や横浜港のように、もっとまちづくりを展開していくことが大事であると感じている。静岡市から、新しい海洋産業の拠点として、日本社会全体に、海の大切さを知ってもらえるような取組を進めてもらいたい。
- ・ 三保は過去の歴史もあって所有権問題など、色々大変であるが、大きな夢を持ちつつ、具体的な施策に取り組めたらよい。

≪山岸委員≫

- ・ 今年からは研究機構が、再来年からは大学院が立ち上がる。今後、デジタル産業の活性化や誘致、大学の学部・分野に対する不満も見えてくると思うため、ニーズのある分野を伸ばしていきながら、社会人を含めて教育の機会を増やしていきたい。

≪橋本会長≫

- ・ 分科会としては発展的に解消するが、今後も静岡大学、静岡理工科大学、東海大学、県とも連携して進めていきたいので、引き続きよろしく願いしたい。

## (11)GX①脱炭素社会分科会

### ≪神成委員≫

- ・ イノベーションが必要と資料に記載されてあるが、具体的な方策がまだ見えていない段階だと思う。もう一度、課題を捉え直す必要があるのではないかと。
- ・ 世界的にも、どこまでの取り組みが十分であるかという点は不明瞭。静岡市としてどこまで取り組むか、という点を整理し、場当たりの取組にならないように、短期的・中長期的な目標を立てることが望ましい。

### ≪橋本会長≫

- ・ 第1回、第2回に比べると、だいぶ網羅的になった。出資制度もできたので、その成果も見たい。やるべきことは多岐にわたるため、初心に帰って再度検討する時期かもしれない。

### ≪内田委員≫

- ・ 大学ではカーボンニュートラルトラディションの取組を行い、各大学もカーボンニュートラルキャンパスを目指すよう取組を行っている。大学として何ができるか、という点に関しては、省エネにより二酸化炭素排出量を削減するという部分を主にやっている。国・市・産業界がそれぞれやるべきことは何なのかを整理する必要があると考える。

## (12)GX②農と食分科会

### ≪神成委員≫

- ・ 売れなければ農業は持続的にできないため、そのための仕組みを発展させることは必要不可欠である。今までも有機農業に関する取り組みを進められているが、得るための仕組みがまだあまりできていない。国の食育計画の全面見直しが1年後に予定されており、そちらとの連携も期待される。これまでの成果を踏まえて体制も含めて今後しっかりと進めていくことが大事である。
- ・ 持続可能な食というのは非常に重要なキーワード。農業を取り巻く状況を踏まえると、時間的な猶予はもうないと思っており、地域における安定的な食の供給をいかに可能にするかという課題は喫緊に取り組むべきテーマ。ビジネスとして継続的に回していく仕組みは、周辺分野の取り込みが不可欠。より発展的・横断的な仕組みを作っていく必要がある。

### ≪黒石委員≫

- ・ せっかく有機農業をここまでやられたので、視野として自然農法まで広げてもらいたい。昨今、食育の話もあり、近藤委員がおっしゃっていた未病予防の話もあるので、農・食・健康の連携は非常に重要なテーマ。農と食だけで区切るのではなく繋げておいてほしい。来年度の分科会がそれぞれ別になっていたのも、ぜひ検討いただきたい。

(全体)

≪酒井委員≫

- ・ 山岸委員がウェルビーイング分科会のコメントでおっしゃっていた、意見が二極化しているかもしれない、という発言は腑に落ちた。平均値だけ見ると、非常に重要な集団を見逃している可能性がある気がしている。この辺りは、もう少し分解度を上げていく必要があると思った。

≪内田委員≫

- ・ 全体を通して思ったのは、例えば新共助社会や子育て、人口減少にも関係するが、学校教育の中のいわゆる教育委員会の取組との連携があってもよいのではないかと考えた。例えば地域のお祭り、歴史伝統文化というところを学校教育と連携させることで、世代間交流につなげていくことができるのではないかと考えた。幼児教育や小学校教育は人間の基盤ができる場所であるから、もっと連携を意識することにより、子育ての環境の充実や人口増にもつながっていくこともあるのではないかと考えた。

#### 【次第5 次年度以降の研究会運営】資料3

- ・ 来年度も引き続き、研究会を年3回行う予定である。
- ・ 分科会については通年開催するが、委員のスケジュール等の調整の中で適宜開催したい。
- ・ 第7回の研究会は、令和7年4月30日(水)の午後に開催予定。
- ・ 分科会の再編については、現在12分科会あるが、9つの分科会に再編したいと考えている。発展的に解消するものと、統合するものがある。
- ・ 新しく設置する産業構造分科会は、人口減少対策分科会の中で、仕事の充実についての議論があり、それを深掘りするために設置するもの。
- ・ また、持続可能な食分科会は、これまで農と食という形で分科会を行っていたが、先ほどの健康の話もいただいたように、それらも含めて、発展的に新たに設置する。
- ・ 最後に、委員の改選について、現研究会委員の任期が3月31日をもって満了となる。
- ・ 今回、分科会の廃止等に伴い、近藤委員、坂田委員においては、今回の任期をもって終了となるが、1年10か月ご尽力いただき大変感謝している。
- ・ また、新たな委員も含め、来年度以降も研究会を開催するため、引き続き委員の皆様のご協力をお願いしたい。

#### 【次第6 会長総括コメント】

- ・ 約2年間、委員の皆様には大変ご尽力いただいた。特に分析の部分については非常に成果が出ている。
- ・ これまでも、やみくもに政策立案をしていたとは思わないが、現場で何が起きているのかがわかってきたことは大きな一歩であるし、わかったことを踏まえて既に取組を進めているところもある。引き続き、抜本的な改革を進められるよう、市全体として努力してほしいし、委員としても協力していきたい。これまでの委員の皆様の様々なご協力に感謝するとともに、今後ご指導のほどよろしくお願いしたい。

**【次第7 市長コメント】**

- ・ 約2年間、きめ細かにご指導いただき委員の皆様には感謝申し上げます。
- ・ 若手職員が中心に研究会の分科会の議論に加わり、分析から政策形成に繋げていく力が高まったと思っている。
- ・ 若い時から分析に基づく政策形成をするという習慣づけができたことは、市としても大きな財産になると思う。
- ・ これまで研究を主に行ってきたが、そろそろ実践に移して行かなければならない。研究会という名前を少し変えるかもしれないが、引き続きご指導いただきたい。

**【次第8 閉会】**

以上